

翻訳において喪われるもの

—『ヨナ書』における伝統的物語表現と文学的謎—¹

ジョナサン・マゴネット

日原 広志 (訳)

ある意味では不可能なことだけが神には可能なのである。神は可能なことを物質のメカニズムと被造者たちの自律性におまかせになったのである²。

シモーヌ・ヴェイユ

物語の概要

『ヨナ書』はヘブライ語聖書で最も読みやすく人気のある物語の一つです。しかしその一見平易な語り口にもかかわらず、『ヨナ書』は多様な物語技法とストラテジー（戦略）、言葉遊び、そして新たな次元の意味付けを示唆するヘブライ語聖書の他の箇所との間テクスト的関連性を含んでいます。これらの要素の多くは、翻訳でのみ読まれる場合、見落とされるか、喪われます。私たちはヘブライ語聖書を扱いながら、これらの文学手法が同書の結びの章〔ヨナ書第4章〕³の意味にいかに強い影響を与えているかを探求することになります。

1 訳注：これは2020年11月20日、Zoomオンライン会議方式で行われた西南学院大学学術研究所主催の公開講演である。原題は、“Lost in Translation: Narrative Conventions and Literary Riddles in the Biblical Book of Jonah”。

2 訳注：シモーヌ・ヴェイユ（田辺保、杉山毅訳）『ロンドン論集とさいごの手紙』（勁草書房、2009）、119頁。

3 訳注：以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

神は預言者ヨナをニネベの都に派遣し、彼らの悪が神の知るところとなると告げさせようとしています。しかしニネベとは聖書読者の記憶において全く中立的でいられるような都ではありませんでした。それはその軍事的侵略の無慈悲さと残酷さで悪名高いアッシリア帝国の首都です。聖書正典中のこの後期の文書〔ヨナ書〕の最も初期の読者たちは、アッシリアが北イスラエル王国を征服し、その住民を国外へ強制移住させ、人口削減分は他地域で征服された民をその国に住ませ、こうしてその以前の歴史とのいかなる連続性も断ち切ったということを確認していたことでしょう。これらの国外追放された民はあの「喪われた十部族」伝説の源となりました。ヨナが神の使命を引き受けるのに気乗りしないことは何ら驚くに値しません。彼の反応はヤッファの港へ行き、船賃を支払い、地中海を横断して、文字通りニネベから世界の真反対にあるタルシシュと呼ばれる場所まで逃げてしまうことでした。しかし、神は船を砕かんばかりの嵐を送ります。船乗りたちは、ヨナが嵐の原因であることを突き止めます。ヨナは、陸に戻すよう求めて任務を完遂するのではなく、自分を船外に投げ出すように彼らに命じます。船乗りたちは躊躇し、ヨナの神に自分たちを助けてくれるように祈ります。全く何の応答も与えられないので、彼らは彼を船外に投げ出します。するとすぐに嵐は止みます。船乗りたちは大変これに圧倒されたので、彼らの宗教的忠誠心の対象をイスラエルの神へと転じました。

ヨナは、彼を呑み込んだ巨大な魚によって奇跡的に救われました—「クジラの中のヨナ」という最も印象的で長寿人気の聖書的イメージの1つを世界にもたらしつつ。最後に、魚の中で3日間過ごした後、ヨナは神に感謝の祈りを献げます。その中で彼は自らの最初の不従順について何一つ述べませんけれども。そのエピソードの滑稽な結末において、その魚は彼を陸地に吐き出します。しかし、ヨナの祈りの結語は、感謝のいけにえを神に献げようというもので、それは、エルサレム神殿に帰ろうという彼の意図を意味するだけでした。ですから、神は「再び」命令を繰り返すことを余儀なくされ、今度こそヨナはニネベに行くことになりました。

第3章で、彼はあっさりニネベに入り、「あと四十日で、ニネベは滅びる」⁴と、ヘブライ語ではたった5語で呼ばわり、そして去ります。どういうわけか、この警告はニネベの人々によって受け容れられ、彼らは断食を呼びかけ、さし迫った危険に対する標準的一般的宗教的対応である、粗布と灰をまといます。しかし、これらの行動を同じように行った王は、自分たちはまた自らの悪の道から離れ去らねばならず、そうすれば神が自分たちを赦してくれるかもしれないという決定的な点を付け加えます。確かに、この行動こそが、神に彼らを罰することを思い直させるのです。

これまで、上述した背景史を超えては、何故ヨナがこの任務を拒否したのかについて直接的説明は何もありませんでした。ナレーターは、ヨナがすでに、ニネベが北イスラエル王国に対して果たすことになる破滅的役割を予見し、その都が神の脅威を生き延びる手伝いを拒否することによって、それを妨げようとしていると想定しているのかもしれませんが。第4の、つまり最終章では、今や都は悔い改め、破滅はもはや起こりそうにないので、ヨナは神の決定に大いなる怒りを表明し、神に自分の命を取り去るよう請います。神は彼に彼の怒りが正しいことかと尋ねますが、ヨナの返答は、都を出てその外に座り、あたかも神の考えを変えさせようとでもするかのように、何が起こるかを見届けることです。彼は長い間待っているのです、太陽から身を守るために自ら避難所を建てます。

ヨナは神の質問に言葉によって答えたのではなく、代わりに立ち去るという行為によって〔応えたので〕、神は同様に諸々の行動によって彼らの会話を継続します。神はヨナを太陽から守るために、一晩で成長する驚くべき植物を創造し、彼を大いに喜ばせます。しかし、その後、神はその植物を枯死させる虫と、枯れた植物と彼の避難所を吹き飛ばす激しい風を送り、ヨナを太陽の熱にさらしたので再び彼は死ぬことを求めます。その後2人の主人公

4 訳注：以下日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 聖書協会共同訳』からのものである。

5 訳注：「オード アルバーイーム ヨーム ヴェ・ニーネヴェー ネフパーヘト」
[עוד ארבעים יום ונינה נהפכת] の5単語。

〔神とヨナ〕の間の最後の対話が続き、この書は神がヨナに提起した長い質問で終わりますが、これに対するヨナからの何の答えも記されていません。

「キー・ワード」と反復法

先に示唆したように、ヘブライ語本文には、物語に特別な次元を付加する多くの単語連想法や言葉遊びがあり、それらは翻訳では容易に見落とされがちです。分かりやすい例では、「座る」という動詞 *ヤーシャヴ* [ישב] が、「彼が座った」を意味する *ヴァツィエーシェヴ* [וַיֵּשֶׁב] の形で使われています。それは先ず第3章で粗布をまとい灰の中に座すニネベの王の描写で、この文法的形 [וַיֵּשֶׁב] で現れます (3:6)。それから第4章に2度、先ずヨナがニネベの悪行を赦した神に怒りを表明しつつ都の外に座る時に (4:5)、そして同文中に再び、彼が避難所を建てて、その下で座した後にも現れます。そうやって、著者は皮肉な並置を創出しました。すなわち、ニネベの都の中では、王が神にそれを救ってくれるよう祈りながら、大きな不安を覚えて灰の中に座しています。ニネベの都の外では、ヨナが神にそれを滅ぼすよう祈りながら、避難所の快適さの中に座しています。

この書に特徴的なことは、著者が比較的限られた語彙を使用する選択をしている点にあります。彼は単語の選択においてきわめて正確であり、物語の特定要素を強調するためにそれらのいくつかを反復使用しています。これらの「キー・ワード」は、叙述されている出来事を下支えする一種サブリミナルなメッセージを提供します。たとえば、ヨナがその任務から逃亡する時、動詞 *ヤーラド* 「下る」 [ירד] が強調されます。それはヨナがどのようにしてヤッフアの港町に下り、船に下り、嵐の間に船底に降りたのかを描写しています⁶。さらに「ヤーラド」には語呂合わせも加えられています。嵐の真只中に、ヨナは深い眠りに落ちます。この眠りを表す動詞は「ラーダム」 [רדם]

6 訳注：協会共同訳ではヤーラドをそれぞれ「ヤッフアに下る」(1:3)、「船に乗り込んだ」(1:3)、「船底に降りて」(1:5)、「私は山々の基、地の底に沈み」(2:7)と訳し分けている。

で、ここでは「ヴァッイエーラーダム」〔וִיָּדָם〕の形が使用されています。私たちはここで、この言葉〔וִיָּדָם〕の中に、ヨナの下降のモチーフのある種の補強として、ヤードの語根を成す子音文字〔יָד〕を聞くことができます。ヨナが海に投げ込まれた時、ヤードは最後に最深部、古代近東で世界を支えている〔と考えられていた〕山々の基への彼の下降を描くために登場します(2:7)。こうして、ヨナの神からの「水平的」逃走は、実際には下向きに進みつつ、一見したところ不可避免的に彼の死にまで至る一連の下降段階なのです。

もう一つの言葉遊びにおいて、同書の中で最も一般的な言葉は、「大いなる」を意味するヘブライ語「ガードール」〔גָּדוֹל〕です。ここでは、その反復はある別の目的に役立っているかもしれませんが、すなわち、ニネベは大いなる都であり、神は海上に大いなる風を投げつけ、大いなる嵐をもたらします⁷。また、船乗りたちは、ヨナの罪を発見した時、大いなる恐れで、海が落ちてくとさらに神へのより大いなる恐れで、恐れます⁸。彼を救う魚は「大いなる魚」です。神がニネベを寛容に扱ったことに対するヨナの反応は「大いなる」悪であり、神がヨナを保護するために植物を生み出すと、彼は「大いなる」喜びを経験します。この反復の効果の1つは、すべてが「実物よりも大きい」という、その物語の「おとぎ話」的特質を強調することです。このことは、それが本当の歴史的な出来事ではなく、寓話として扱われるべきであることを示唆しているでしょう。

もう一つの反復の例が最初の章にあります。「投げつける」を意味する動詞「トゥール」〔טוֹר〕は、ヘブライ語聖書にはめったに現れませんが、第1章では4回使用されています。すなわち、神は風を海に投げつけます(1:4)。

7 訳注：協会共同訳ではガードールをそれぞれ「大いなる都ニネベ」(1:2, 3:2, 4:11)、「大風」(1:4)、「大しけ」(1:4)、「人々は非常に恐れ」(1:10)、「人々は非常に主に畏れ」(1:16)、「巨大な魚」(2:1)、「非常に大きな都」(3:3)、「非常に不愉快になり」(4:1)、「喜び、とうごまがすっかり気に入った。」(4:6)と訳し分けている。

8 訳注：協会共同訳「非常に恐れ」(1:10)のヘブライ語本文の同語根の名詞と動詞を重ねる表現「大いなる恐れを恐れた」を意識した講演者の英文による。

船乗りたちは船を軽くするために貨物を船外に投げつけることを余儀なくされます(1:5)。ヨナは船乗りたちに彼を船外に投げつけるように頼みます(1:12)。そして気乗りしないながら、神への助けを祈った後、彼らは彼を船外に投げつけます(1:15)⁹。このキーワードの繰り返しの効果は、風を「投げつける」という神の最初の行為と、船乗りたちの〔荷を捨てると言う〕反応と〔の間の〕、最終的にはヨナに直接及んだ影響との間の、潜在的な因果関係を示すことです。これらすべての行為と出来事は、ヨナに自らの使命を思い出させるための神の代理人のように役立っています。

ラーアー「悪」をめぐる問題

読者は、同書の開巻から、その物語の中で働いている反復法や他の言葉遊びに細心の注意を払うように敏感にならざるを得ません。私は第3章と第4章の架け橋となる、著者によって使われたさらにもう一つのそうした言葉遊びを紹介する必要があります。ニネベの人々が悔い改めた時、本文は私たちに、「神は、人々が悪の道を離れたことを御覧になり、彼らに下すと告げていた“悪”(あるいは“罰”)¹⁰を思い直され、そうされなかった。」と語ります(3:10)。この文には、ヘブライ語の単語「ラーアー」[רָאָה]に伴う明らかな翻訳の難題を含んでいます¹¹。それは時々、「良い」を意味する単語「トーブ」[טוֹב]と対比され、それゆえある文脈においては、ラーアーを「悪い」または「悪」と翻訳するのは正しいことです。第1章を振り返れば、私たちは、神がヨナをニネベに遣わしたのは、彼らの「ラーアー」「悪行」が神の

9 訳注：協会共同訳ではトールをそれぞれ「大風を起こされた」(1:4)、「海に積み荷を投げ捨て」(1:5)、「海に投げ込んでください」(1:12)、「海に投げ込むと」(1:15)と訳し分けている。

10 訳注：協会共同訳では「災い」。

11 訳注：協会共同訳ではラーアーをそれぞれ「彼らの悪」(1:2)、「この災い」(1:7)、「この災難」(1:8)、「悪の道」(3:8, 10)、「彼らに下すと告げていた災い」(3:10)、「ヨナは非常に不愉快になり」(4:1)、「災いを下そうとしても思い直される方」(4:2)、「ヨナの不満は消えた」(4:6)と訳し分けている。

前に届いてしまっているためであると読みました。第3章では、その同じヘブライ語単語は、ニネベの人々が彼らのラーアー、彼らの悪の道から離れ去る時に、そして神が彼らに下そうとしている同じ単語「ラーアー」について自らの考えを変える時に再び登場します。この2番目のケースでは、その単語を「悪」というよりむしろ「罰」として翻訳する必要があるようです。おそらく、この使用法は、意図された罰が、彼らが行っていた悪と正確に釣り合うもの一尺には尺を一であったことを示唆しています。しかし、私たちがいかにそれを翻訳しても、私たちはヘブライ語がニネベの悪と神の罰との間を直接結びつけている〔事実〕から逃れることはできません。

しかし、その直後の第4章の最初の節で、その同じ単語、ラーアーが再び現れることについて、私たちはどう判断すべきでしょうか。ここではその語は、ニネベが滅ぼされないことを知ったヨナの反応について言及しています。直訳は「そして、それはヨナにとって悪だった、大いなる悪、そしてそれは彼を怒らせた」となります。著者は今や、ニネベの人々の悪行と、神が彼らに科そうとしていた罰と、そして神がその罰を取り消す決心をしていると知った時のヨナの悪感情とを結びつけています。英語の翻訳では、この文のこの単語の外観を和らげるさまざまな方法を用いています。たとえば、「しかし、ヨナは大いに気を悪くし、怒った」。おそらくヘブライ語により近いのは新国際版聖書〔NIV〕です。「しかしヨナにはこのことはひどく間違っているように思えた…」しかし、どのようにその文を翻訳しようとも、ニネベの人々の悪行、神罰の「悪」、そしてニネベの人々が寛大に扱われたことに対するヨナの怒りの反応の「悪」の間の一少なくともヘブライ語において〔は見られる〕—思考の連続性を見ないで済ますことは困難です。単語「ラーアー」の3つの用例は、私たちが物語をどのように理解するかによって区別もできますが、それでもヘブライ語の原文では、それらは深く相互に関連しており、課題は残ります。私たちは神の反応がどこか「ラーアー」であったというヨナの感情に、神がどのように取り組むかを以下に見て行きます。

奇跡と神名

今から、第4章におけるいくつかの文学的手法に取り組みたいと思います。〔2章で〕神がヨナを呑み込ませるため大なる魚を送るとき、それは「神が備えた」または「割り当てた」を意味する動詞「マーナー」〔מָנָה〕によって、「ヴァイエマン」〔וַיֵּמַן〕という形で、導入されます。この動詞は、ヘブライ語聖書ではまれですが、本書ではこの形〔ヴァイエマン〕で4回登場します。神は巨大な魚を「備え」（2：1）、神は「植物」を「備え」（4：6）、神は虫を備え（4：7）、そして「東風」を備えます（4：8）¹²。この反復は、これら4つの出来事各々の奇跡的な性質を補強し、その物語の「実物よりも大きい」という原則を再び強調します。しかし、この単純な繰り返しがさらなる次元を持つようになるのは、ヘブライ語においては、4つの事例の各々で、その動詞の主語として神の〔一つの〕名または複数の名〔の連結形〕の異なるバージョンが使用されていることに注目する時です。著者は明らかに、これら神名に想定される異なる意味を用いて作劇しています。

ヘブライ語聖書内で神に使用されている2つの主要な名前は、「エローヒム」〔אֱלֹהִים〕という単語と、英語で YHWH と書かれる4つのヘブライ子音文字、ヨッド、ヘー、クワ、ヘー、いわゆるテトラグラマトン〔יהוה〕で構成される単語です。ラビ的伝承によれば、この形の御名は、大贖罪日にエルサレム神殿で大祭司によって年に一度だけ声に出して唱えられたものです。それ以外では、ユダヤ教の伝統は、この形の神聖な御名の発音を禁じており、その代わりに、祭儀的文脈でその名前が声に出して語られる時には、主人または主を意味する単語「アドーン」〔אֲדֹנָי〕の一形態である「アドーナーイ」〔אֲדֹנָי〕という語でそれを代用します¹³。非常に大まかに言えば、エローヒムは、地域の神々に言及するにせよ、〔聖書の〕唯一究極の天地万物の

12 訳注：協会共同訳ではマーナーをそれぞれ「主は巨大な魚に命じて」（2：1）、「神である主がとうごまを備えた」（4：6）、「神は一匹の虫に命じて」（4：7）、「神は東風に命じて」（4：8）と訳し分けている。

13 訳注：以後講演者の用いる「アドーナーイ」はいずれもテトラグラマトン（יהוה）を指す。

神としてにせよ、神についての普遍的な呼称であるように思われます。テトラグラマトンは、イスラエルによって独自に使用されている同じ天地万物の神の名前です。それはいわば、神がイスラエルとだけ共有する親密な個人名です。

しかし、これらは聖書本文内で2つの神名が使用される唯一の方法ではありません。とりわけ同じ物語の文脈内でそれらが一緒に登場する時は〔そうです〕。2-3の例を挙げてみます。

モーセが燃える柴で神に出会う時（出エジプト記3：1-15）、テトラグラマトンは、モーセに「現れた」ものがアドナーイの天使であるという客観的な情報を読者に示すために使用されます（3：2）。続いて、その章句内で、「エローヒム」という語は、彼に話しかけているある種神的なものの顕現を「見る」というモーセの主観的経験を表現するために使用されています（3：4）¹⁴。動詞「見る」は、この燃える柴の記事中の一つのキーワードであり、読者は、その章句の終わり（出エジプト記3：15）で神の名前としてのテトラグラマトンの意味が最終的に啓示されるまで、モーセの何が起こっているのかを理解しようとする葛藤を観ることになります。交互に現れる神名は、その物語内での、二つの視点—客観的〔視点〕と主観的〔視点〕、語り手及び読者のそれ〔視点〕と登場人物モーセのそれ〔視点〕—の間の切り替えを示すのに役立っています。

非常に異なる方法で、2つの名前はサムエル記上第4章から第6章で詳述されている一連の出来事において交互に現れます。ペリシテ人との戦争中、大祭司エリの二人の息子は、神が彼らのために戦ってくれるように、契約の箱を彼らとの戦場に運んで来ることに決めます。その箱は効力を持たないことが露呈し、実際にペリシテ人によって奪われてしまいます。この状況では、

14 訳注：「すると、柴の間で燃え上がる炎の中に、主の使いが現れた。」（出3：2）と「主は、彼が道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から呼びかけ、『モーセ、モーセ』と言われた。彼は『御前におります』と言った。」（同3：4）を参照。モーセの認識・体験に関する描写では「神」となっている。

その箱はエローヒームの箱〔ארון אלהים〕として言及されます。つまり、この名前は、その箱が人間の目的のために道具化されており、全く何の神的な力も宿っていない時に使用されます。その箱はアシュドドのペリシテの神殿に安置されます。翌朝、神殿のダゴン神の像がその箱の前でうつぶせに倒れているのが発見されます（サムエル記上5：3）¹⁵。そして箱が真の神的な力を開示するその状況下では、それはアドナーイの箱〔ארון יהוה〕と表現されるのです。著者は、箱の誤用を批判するために、またその結果として起こった操られることへの神の拒絶を〔表すために〕、彼の物語技法の一部として、その2つの神名を交互に使用しています。

3つ目のバリエーションは民数記の第22章に見出されます。魔術師バラムは、莫大な報酬のために、イスラエルの民を呪うべく招かれます。しかし、神は彼がそうすることに同意しているかに見えて、しかし後には神は彼を殺そうと天使を送ります。天使はバラムの有名なロバだけが見ることができ、〔ロバは〕自分の主人を救うために〔人語を〕しゃべります。この物語では、2つの神名の頻繁な交替現象は、バラム自身の中で起こっている、彼が個人的に望んでいること（エローヒーム）と、神（アドナーイ）が彼に行うよう意図していることとの間の心理的葛藤を示すために、語り手によって使用されているように思われます¹⁶。

最後に、その2つの名前のそれぞれの意味を差異化できるかも知れない4番目の事例があります。神がアブラハムに彼の息子を犠牲にするように求めた時（創世記22章）、神が最初に彼に語りかけたのはエローヒームとしてで

15 訳注：「神の箱は奪われ、エリの二人の息子ホフニとピネハスは戦死した。」（サム上4：11）と「翌日、アシュドドの人々が夜明け前に起きてみると、ダゴンは主の箱の前で、地にうつ伏せに倒れていた。人々はダゴンを起こし、元の場所に据えた。」（同5：3）を参照。

16 訳注：「その夜、神はバラムのもとに来て言われた。「この者たちがあなたを呼びに来たのなら、起きて彼らと共に行くがよい。」（民22：20）と「主の使いは言った。「なぜ、あなたはあなたの雌ろばを三度も打ったのか。私はあなたの敵として出て来た。あなたが私の前に誤った道を行くからだ。」（民22：32）を参照。但し、バラムとロバの物語においては、神名の使い分けは他の例証章句ほど一貫しているわけではなく、講演者は神名の揺れにバラムの内的葛藤を見る可能性を提示している。

す(22:1)が、彼が犠牲を献げるのを止めるのはアドナーイの天使〔מלאך יהוה〕です(22:11)¹⁷。この名の変化の1つのありそうな解釈が、ラビ文献の中に見出されます。彼らは、特定の文脈では、エローヒーム〔אלהים〕は厳格な正義という神の属性を代表し、これに対してアドナーイ〔יהוה〕は神的憐れみという神の属性を代表し、前者の側面がアブラハムを試みつつ、しかし後者は、最終的に彼を寛大に扱うのだと示唆しています。

これらの例は、神に帰されたその諸々の名前が、聖書の著者たちによって、特定の文脈によって決定されるものとして、非常に異なる属性、特質または意味を表す可能性があることを示しています。

さてヨナ書での2つの神名の用法に戻ると、私たちは既に指摘しましたが、第1章で、ヨナは終始アドナーイについて語るのに対し、船乗りたちは最初のうちこそエローヒームの語を用いつつ自分たちのそれぞれの神々に祈っていました。しかし、船乗りたちはヨナが彼らの窮状の原因であり、彼がどうやら自身の神から逃亡中であるらしいと知った時、彼らが助けを求めて祈るのはアドナーイに対してと変わり、そして彼らが嵐から救われた時、第1章の終わりで彼らが誓いと犠牲をささげるのはアドナーイに対してなのです。つまり、神名の使用に関連したあの普遍性と特殊性の側面がこの章においても機能しています。興味深い対照として、第3章では、ニネベの王は民にエローヒームに向かって叫び求めるように命じ、「かのエローヒーム」は自ら〔単数〕の神的怒りを思い直され〔単数〕、我々は滅びを免れるかもしれないと付言します。ここでは、ニネベの王が唯一の天地万物の神の概念を持っていることを示しつつ、エローヒームの語が動詞単数形と共に使用されており、彼は「私たちが滅びることのないように」という希望を表明する時、船乗りたちと同じ言葉(1:6, 14, ならびに3:9参照)さえ使用します。しかし、王は、アドナーイに対して、つまりイスラエルの神に対して祈りを献げるといふ、船乗りたちによって取られた次なる一歩を踏み出すこ

17 訳注：「これらのこのの後、神はアブラハムを試みられた。神が、『アブラハムよ』と呼びかけると…」(創22:1)と「すると、天から主の使いが呼びかけ、『アブラハム、アブラハム』と言った。」(創22:11)を参照。

とは決してありません。(このことは、船乗りたちは実際にイスラエルの神に改宗したが、ニネベの人々は〔改宗〕しなかったというラビ的見解を説明するものです)したがって、ヨナ書の第1章と第3章では、その2つの神名の使用は、エローヒームの語と結びつけられた普遍的概念と、アドナーイという名を用いて〔表される〕その天地万物の神とイスラエルのつながりに特有な親密さとの間にある区別と関連付けられています。

しかし、私たちが、神が奇跡的な被造物や出来事を備える場面でのあの〔動詞マーナー〕4事例に関連した神名の使用をより正確に見るなら、ある異なる原則が働いているように見えます。2章1節で、神がヨナの命を救うあの大なる魚を備えるのは「アドナーイ」〔יהוה〕としてです。4章6節では、神がヨナの頭上に伸びる植物を備える時、〔記号マクケフ‘で〕結合された名前「アドナーイ-エローヒーム」〔יהוה-אלהים〕と一緒に現れます。ただし、2つの名前のその使用は、以下で私たちが論じることになるその植物の2つの目的を反映している可能性があります。そのとうごまの木を枯死させる虫は、エローヒームの一般的な異形、つまり子音文字「ハー」による定冠詞を伴う「ハー・エローヒーム」〔האלהים〕、文字通り「かのエローヒーム」によって導入されます。最後に、東風は、定冠詞なしで、「エローヒーム」〔אלהים〕の語だけで導入されています¹⁸。特に、別のいくつかの単語が本書全体で著者によって用いられるその正確さをここまで例証してきたので、これら4つのバリエーションを私たちはどのように説明できるのでしょうか？ または別の言い方をすれば、彼はどのような物語技法を適用しているのでしょうか？ もっと言えば、彼は読者とどのような文学的ゲームをしているのでしょうか？

それに答えるために、私たちが必要とする別の情報があります。これはヘブライ語の言葉遊びの形態の中にあり、翻訳で再現するのは困難ですが、原

18 訳注 12 で見たように、協会共同訳では「主は巨大な魚に命じて」(2:1)、「神である主がとうごまを備えた」(4:6)、「神は一匹の虫に命じて」(4:7)、「神は東風に命じて」(4:8)と訳し分けており、4章7節が「かの神」と冠詞付きである点は訳出されていない。

語では直ちに明白なものです。それは4章6節、2つの神名を一緒に活用する節中にあります。「神である主がとうごまを備えた。それはヨナを覆うまでに伸びた。彼の頭の上に陰を作るために、そして彼を彼のラーアー — 彼の“悪” — から救い出すために」¹⁹私たちは単語ラーアーを翻訳する際の問題性については、既に論じてきました。ですから、おそらく私たちは神がやろうとしていることから、それについてより多く何かを学ぶこととなります。ここではヘブライ語の言葉遊びは、「彼の頭の上に陰を作るために」と「彼を彼の悪から救い出すために」という2つのフレーズの並置の中にあります。ヘブライ語では、それは「リフヨート ツェール アル ローシヨー レハツツィール ロー メーラーアートー」[להיות צל על־ראשו להציל לו מרעתו]と読まれます。「リフヨート ツェール」[להיות צל]というフレーズは、動詞「なる」と、名詞ツェール「陰」[צל]の結合です。その言葉遊びは、以下のフレーズ「レハツツィール ロー」[להציל לו] — 語根ナーツァル「救う」[נצל]と代名詞ロー「彼を」[לו] — と伴って機能します。ヘブライ語が「リフヨート ツェール」[להיות צל]「レハツツィール ロー」[להציל לו]と並置されている場合、その語呂合わせは明白です。それは太陽の熱から彼を覆うため、しかし何らかの方法で、ニネベが滅ぼされないことによる彼の悪感情と怒りから彼を救い出すためという、その植物の二重の目的を強調するのに役立ちます。この二重の目的が、二つの神名の組み合わせによって導入されているのはきっと偶然ではありません。——アドナーイは憐みの行為を反映しつつ、他方エローヒームは、少なくとも教示的、あるいは正義の目的さえも伴っています。私が主張したいのは、ヨナと神の間の非常に個人的な親密な議論を扱っているこの章では、外の世界は後退しているので、著者がこの内的対話のために、2つの神名を一緒に使用することに対して、ある異なる意味を採用していると想定することは正当であるということです。ここでの2つの名前の使用の違いは、[創世記22章アブラハムのイサク献供で上述した]ラビ的伝承によって示唆された線に沿っています。アドナーイは、ヨナの命を

19 訳注：後半は講演者の英訳による。協会共同訳では「それはヨナを覆うまでに伸び、頭の上に陰を作ったので、ヨナの不満は消えた」となっている。

救った魚を神が備える際の使用に示されるように、彼に日陰をも提供するところの、神の憐みという属性をほめかしています。しかし、エローヒームの付加は、ヨナの「ラーアー」—ヨナにとってこの世に内在する悪を代表する〔筈のニネベの〕人々に向けられた神の憐みに対するヨナの怒り—を変えようと試みているところの、神の正義という属性を表しています。

聖書内的注解

同章における2神名使用の意義をめぐるこの提案を補強するもう一つの聖書の文芸技法があります。それは、ヨナ書中最も挑発的の章句であるものと関連しています。ヨナは以前〔第2章〕、魚の腹の中で神に祈っていました。その祈りは、彼らの間の親密な関係性を示唆しつつ「ヨナは自らの神であるアドナーイに祈って」〔וַיִּתְפַּלֵּל יוֹנָה אֱלֹהֵי יְהוָה אֱלֹהָיו〕という言い回しで導入されました。しかし第4章では、その親密さは大いに減じられています。ヨナの怒りを描写した直後、本文は「彼はアドナーイに祈った」〔וַיִּתְפַּלֵּל אֱלֹהֵי יְהוָה〕と続き、「自らの神」〔אֱלֹהָיו〕というフレーズを削除しています。彼は、1章14節で船乗りたちによって使用された「アンナー アドナーイ（どうかアドナーイよ）〔אָנָּה יְהוָה〕、私たちを滅ぼさないでください」と同一の定式を用いつつ、請願の祈りへの慣習的導入で以て始めます。ヨナもその同じ敬虔な嘆願で始めるのです、「アンナー アドナーイ（どうかアドナーイよ）」と。しかし、その後、ニネベに対する自分の任務は馬鹿馬鹿しいものであると彼が考えている点に関して彼の鬱積した怒りが爆発するのです。「これは私がまだ国にいたときに言っていたことではありませんか!?! ですから、私は先にタルシシュに向けて逃亡したのです！」そろそろ、私たちは彼が怒りと欲求不満で叫んでいるのを、自分の行動を正当化しようとしているものとして想像することができます。以下の展開を理解するために、私たちは、ヘブライ語聖書のなもう一つの一般的な文芸技法について、つまり、より初期の聖書章句中にある特定のキー・フレーズあるいは重要なフレーズが、より後代の本文において、そのままの形で、あるいは、新しい文脈の要請を反

映した変更を伴って、引用される仕方について、認識する必要があります。最も一般的に引用されている箇所の一つは、出エジプト記34章6-7節に見出されます。そこでは、神がモーセに、イスラエルの罪、悪行、あからさまな反逆行為に対して神がそれによって応答するところの憐みについて、しかしまた、神とイスラエルとの間の契約についてのあの術語〔後述するヘセド&エメト〕の故に、神の憐みの上に設けられた制限についても啓示します。その章句は以下のようなものです。

アドナーイ、アドナーイ、憐れみ深く、恵みに満ちた神。／怒るに遅く、慈しみとまことに富み 幾千代にわたって慈しみを守り／過ちと背きと罪とを赦す方。／しかし、罰せずにおくことは決してなく／父の罪を子や孫に／さらに、三代、四代までも問う方。

その重要な術語は、2組のフレーズであり、それぞれがヘンダイアディスーその際その組み合わせの持つ意味が個々の2つの意味を足しただけよりも大きくなる〔二詞一意〕一の形式であります。したがって、ヘブライ語の「ラフーム ヴェ・ハンヌーン」「恵みと憐れみ〔の神〕」〔רחום וחנון〕は、「愛と憐み」を意味する単語「ラフーム」〔רחום〕と、「恵み深い」一何の見返りをも期待しない寛大さで行動すること一を意味する「ハンヌーン」〔חנון〕とを組み合わせています。それら〔ラフーム&ハンヌーン〕は一緒になることで、神の境界線を持たない、無制限の愛について語ります。しかし、第2のペアである「ヘセド ヴェ・エメト」「慈しみと真実」〔חסד ואמת〕は、二者間の契約に存する愛と忠誠心、単なる契約上の義務を超えた互いに働く信実さである「ヘセド」〔חסד〕を、2番目の単語「エメト」「真実」〔אמת〕一「しっかりした」,「信頼できる」ことを意味する語根「アーメン」〔אמן〕から派生一と結びつけます。この組み合わせ〔ヘセド&エメト〕は、境界線を持ち、相手からの忠誠心と信実さを要求し、期待し、もしその信頼が裏切られたなら重大な結果を伴うような愛について語っています。その効果は、いかにして全能で計り知れない神が、単なる死すべき人間との正式な関係性を創出することができるのかという神学的問題に取り組むことです。その答えは、両者間で永遠に拘束力があり、諸条件を課すところの、愛に基づく協

約という、一つの契約の創出の中にあります。これが、出エジプトの章句がいささか暗い結語〔裁きについての言及〕になっている理由です。境界線を持たない憐みは、神が人間の犯す様々な罪を赦すことを可能にしますが、彼らが犯した過ちを認めて悔い改める準備ができていることを条件とします。そうでない場合は、罰則があり、これ故に第三、四世代への刑罰があります。しかし、指摘しておかねばならないことは、これはまだ生まれていない世代を通して続く罰を意味していないということです。むしろ、ここで呼びかけられているのは、十戒におけるのと同様に、家族、奴隷、土地、家畜が彼に属するところの、この家父長制社会における家長である、イスラエル人の成人男性です。そのような家長はその生涯で自らの子孫4世代を見るまで生きることができるので、その警告は彼がすることは善か悪かを問わず彼ら全員にその結果をもたらすということです。「大いなる力には大いなる責任が伴う！」〔のです。〕

出エジプト記のこの章句の力と重要性はそれほどのものであるため、それは異なった状況で神に訴えるために求められ、修正され、拠り所とすることができます。モーセは、偵察隊とのエピソードの後に神が民を捨てると脅した時、神に異議申し立てをするためにそれを使っています（民数記14：18）。何度も何度も、その都度変化を伴って、それは詩編と預言書で引用されています（詩編86：15, 103：8, 145：8, ヨエル2：13-14）。ヨナがここで彼の怒りと欲求不満に圧倒されながら使用しているのは、まさにこの文章〔出34：6-7〕のヨエル書2章13-14節に見られるバリエーションなのです！

あなたが“恵みに満ち、憐れみ深い神であり、怒るに遅く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される”方であることを私は知っていたのです（4：2）²⁰。

ヨナ書とヨエル書にある出エジプト記の原文に対する特別な付加は、「災いを下そうとしても思い直される方」という最後のフレーズです。ヨナは、イ

20 訳注：引用符は講演者による。

スラエルだけが利用可能であるべきだと彼が思っているらしいこの種の憐みを、神が喜んで彼らの大敵であるニネベにまで拡張したことに激怒しています。ヨナは文字通り、神の愛情深い配慮についてのこの表現を神の顔に浴びせたのです。ヨナによるこの行為こそ、冒瀆に相当しますが、また、自分〔著者〕の主人公、あるいはおそらくアンチ・ヒーローたるヨナがこのやり方で神を攻撃することを許可する、本書の著者の毒のあるユーモアと並外れた勇気をも反映しています。おそらく、最終的にヨナを怒りで爆発させたものは、より初期の聖書章句〔出エジプト記〕からのさらに別の引用です。金の子牛の破滅的なエピソードの後、神がイスラエルの人々をまさに捨てようとしていた時、モーセはなんとかそうしないように神を説得しました。その章句は次の文で終わります。

それでアドナーイは、ご自分の民に下すと告げた「ラーアー」(邪悪／罰)を思い直された。(出エジプト記32:11)

その同じ文が、しかし今回はエローヒームの名において、そしてニネベに言及しつつ、第3章を締めくくった時、それはヨナにとって我慢の限界だったに違いありません。

それでエローヒームは、彼らに下すと告げていた「ラーアー」(邪悪／罰)を思い直された。そして、それを行わなかった。(ヨナ3:10)

いくつかの結論的な見解

文学的および修辭的な観点から、私たちはキー・ワードの反復がいかにして本文の表面下にサブリミナルなメッセージを創出するかを見てきました。——ヨナの死への下降、ヨナの逃亡に対する神の初動対応が、自然や異邦人を介して間接的にヨナへメッセージを伝えるその手法、また、言葉遊びがどのように一見独立した事象の間に結びつきを創出し得るか、神名の交替がいかにして異なる理念や価値を反映するために用いられ得るか、ヘブライ語聖書が、より初期の資料を、元来の意味を提示するためにも、それを修正または批評するためにも再利用しつつ、それ自体についてどのように注解するか。

結びの章に登場する諸々の文学的ストラテジーを所与として、その物語はどのように解決するのでしょうか？

神はヨナにそのように怒るのは正しいことかどうか尋ねますが（4：4）、ヨナは答えません。代わりに、彼は都を去り、あたかも神に思い直して都を減ぼさせようとするかのように、何が起るかを見届けるために外に陣取ります。ヨナは会話の条件を行動で以てと決めているので、神もまた、行動によって—植物、虫、風を以て—その対話を継続します。神はこれらの小さな奇跡をどのように用いているのでしょうか？これに答えるには、聖書学者たちによって気づかれたある問題に取り組む必要があります。もしヨナがすでに太陽から自らを保護するための避難所を持っていたなら、植物に同じ日陰を提供させる必要性は何でしょうか？ある歴史的批評的アプローチは、この章が以前の複数の資料からの集積物、つまり、そのうちの一つはヨナが避難所を建てたヴァージョン、もう一つは奇跡の植物のヴァージョン、この二つのヴァージョンがその後融合されたものであることを示唆しています。

しかし、日陰の源をめぐる二つの記述の〔並存の〕必要性を説明する別のより一貫した方法があり、これも著者の文学的スキルと一致しています。それは、都の中で灰の上に座ってその生存を祈っているニネベの王と、外に座ってその破滅を祈っているヨナとのあの〔4頁〕比較に私たちを連れ戻します。しかし、ヨナの場合、「彼は座った」という言葉が同じ節の中で繰り返されています。なぜならヨナは、太陽にさらされたまま座っていることがどれほど危険であるかを認識しているからです。それで、彼は立ち上がり、避難所を建て、そして再び座るのです。ヨナの神に対する怒りの論理的根拠が何であれ、彼の最初の関心事は、実際に、そして理解できることですが、彼自身の身の安全です。それで、彼は自分の避難所を建てます。神の反応は、行為には行為であり、まるで次のように言うかのようです。「お前の本当の関心事は、実際にはお前の個人的な快適さだ。よろしい、快適さについて語ろう！私はお前に快適さと日陰の奇跡的な源を提供しよう」そこで植物〔登場となったわけ〕です。しかし、それから神はそれを取り去り、ヨナは東風と焼けつく太陽にさらされます。こうして、自分が全く嬉々としてニネベの

人々の上に臨めばよいと思っていた種の苦しみを、彼は経験することを余儀なくされます。この読みでは、その植物〔のくだり〕は冗長などではなく、言葉だけではなく諸行動で導かれる対話の不可欠な部分なのです。その植物は後に、神がヨナの憐みの感覚に挑むに至って、さらなる重要性を持ちます。——「あなたは自分で労することも……なかったこの植物にも憐みを感じている。どうして私が、ニネベに憐みを感じるべきでないだろうか？」(4:10-11)²¹

その書の終わりは、私たちに、神のヨナへの問いだけでなく、ヨナの返答はどのようなものであったのかについての読者の問いもまた残しています。彼は、ニネベの人々もまた神の被造物であり、神がイスラエルに提供したのと同じ憐みを受けられることを正しく理解するようになったのでしょうか？それとも、彼は最後まで頑固で、独善的で、納得がいかないままだったのでしょうか？神の最後の問いはヨナに投げかけられたのと同様に、彼の旅に同行した読者にも投げかけられたのであり、それは著者の修辭的スキルの一部です。というのも、それは語り手の戦術とスキルの一部だからです。彼〔著者〕は、普通の状況なら神の僕、預言者として称賛され、尊敬される人物を主人公として選びました。読者は思わず自分を〔主人公に〕重ね合わせたくなります。しかし、いたるところで、ヨナが会おう異邦人、外国人の船乗りたち、憎まれ、恐れられているニネベの人々は、彼らの行動において非常に称賛に値することが示されますが、ヨナ〔の行動〕は少なくとも読者の共感を呼ぶものではありません。それに気付きさえしないとしても、私たちは私たち自身の本能的な忠誠心と思い込みについて異なる視点を獲得することを余儀なくされるようになるでしょう。神の最後の問いは、読者である私たちに非常にしっかりと向けられています。

21 訳注：講演者による。協会共同訳ヨナ書 4章 10-11節「あなたは自分で労することも育てることもせず、ただ一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまをさえ惜しんでいる。それならば、どうして私が、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、おびただしい数の家畜がいるのだから。」

神は本文中で最終意見を述べたのかもしれませんが、著者は私たちに最後の文学的な楽しむべきトリックを残します。それは悲しいことに翻訳では完全に失われます。第4章は、ヨナの神への長いスピーチ（4：2-3）で始まり、神の長い返答と問い（4：10-11）で終わります。もしあなたがたがヨナの神へのスピーチにおけるヘブライ語の単語を数えることが出来れば、それらは39語になります（ヘブライ語の数単語はハイフン〔に似たマッケーフ〕でつながれているため、それらを1つの単語として扱うことが可能です。その場合、単語の数は30になります）²²。もし今私たちが、「多くの家畜」についての謎めいた終わりを伴う、神の締めくくりのスピーチに目を向けて、同じ二重カウントを実行するなら、その数字は…39と30になります²³。著者は、2人の主人公、神とヨナに等しい「放送時間」を与えました。神のニネベに対する忍耐よりも大きいのが、神のヨナに対する忍耐なのです。そして、おそらくさらに大きいのは、著者の見解では、気難しいがあまりにも人間的すぎる自らのパートナーの頑固さ、不敬、そして勇気に対する神の敬意なのです。

22 訳注：4章 2-3 節

אנה יהוה הלוואיזה דברי עדיהויתי עליאדמתי עליכן קדמתי לברח תרשישה
 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 :כי ידעתי כי אתה אליהנון ורחום ארך אפים ורביחסד ונחם עליהרעה:
 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15
 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11
 ועתה יהוה קחנא אתינפשי ממני כי טוב מותי מחיי:
 単語総数 39 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
 マッケーフ付きを一単語とみなして 30 30 29 28 27 26 25 24 23 22

23 訳注：10-11 節

אתה חסת עליהקיקיון אשר לאיעמלת בו ולא גדלתו שבנילילה היה ובנילילה אָבָד:
 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 ואני לא אחוס עלינינוה העיר הגדולה אשר ישבה הרבה משתיםיעשרה רבו אדם
 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17
 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13
 אשר לאידע בוימינו לשמאלו ובהמה רבה:
 単語総数 39 39 38 37 36 35 34 33 32
 マッケーフ付きを一単語とみなして 30 30 29 28 27 26 25